

I 福山市	ミッション 福山に愛着と誇りを持ち、変化の激しい社会をたくましく生きる子どもを育てる。 ビジョン 各中学校区・学校が、資質・能力の育成に向けた特色ある教育課程を編成し、 日々の授業を中心として評価・改善を進めながら、子どもたちの確かな学びを実現している。
-------	---

II 中学校区	前年度学校関係者評価の主な内容 ・「オール新市」を掲げる中で、地域の良さの発信やボランティアの取組など、もっと地域を好きになる取組を進めてほしい。 ・HP などでの出前授業の取組（キャリア教育の取組）は興味深く、今後も継続して児童生徒にたくさん学んでいただきたい。 ・学校に登校できない子どもたちにも目を向け、そこへの取組をもっと発信した方がよい。（知らない人が多い。）	児童生徒の現状 ・全国学力・学習状況調査等をはじめとした学力調査を踏まえ、基礎的・基本的な内容の定着に重点を置く必要がある。 ・キャリア教育の実践を通じ、校区で育てたい資質・能力を意識しながら様々な活動に取り組むことができおり、4 月当初から 12 月末で、肯定的評価をする児童生徒が増えている。	育成する力 資質・能力 めざす子ども像 (義務教育修了時の姿) 中学校区として統一した取組等	チャレンジ&チェンジする力、自己理解力、自己表現力 ・自分の目標達成に向けた計画を立て、取り組む児童生徒。そして、その取組を定期的に振り返り、改善策を考える児童生徒。 ・自分の将来の夢や目標を持つ児童生徒。 ・自分の思いや考えを相手に分かりやすく説明する児童生徒。 ・地元事業者や地域の方と育成したい資質・能力を共有しながら、出前授業、探究学習、職場体験学習、面接など、様々に取り組んでいく。
---------	--	--	--	--

III 自 校	ミッション 夢や志を持って、自らの力でたくましく生きる児童を育てる	学校教育目標 自ら考え、心豊かで生き生きと活動する児童を育てる	現 状 ＜児童生徒＞ ・全国学力学習状況調査では、国語、算数ともに全国平均を下回っており、基礎学力の定着に課題がある。また、正答率 40%未満の児童の割合が、約20%と個人差が大きく、個別の手立てや支援が必要な児童が複数いる。 ・「自分の思いや考えを表現できた」児童は、86.0%で、自己表現力が高まってきているが、友だちの考えと比較することで、考えを広げたり深めたりすることには課題が残る。 ・年間を通して、体力向上のための自己目標をもって取り組むことで、「自分の体力の向上が感じられた」児童は 92.6%であった。 ＜授業＞ ・研修や互いの授業参観を通して、授業づくりに関わる対話を通して、教職員が意欲的に授業改善に取り組んでいる。 ・地域とのつながりを持った活動を継続することで、地域と共に学ぶ探究学習の推進とキャリア教育の充実を図る。	育成する力 資質・能力 めざす子ども像 研究 めざす授業の姿	5 6 年 3 4 年 1 2 年 テーマ 内容等	活動をふり返り、改善策を考える。 困難な事にも挑戦し、最後までやりきる。 自分のやりたい事に挑戦する。 対話を通して自分の考えを更新できる授業の創造 ～互いの考えを認め合い、深め合う児童の育成～ 国語科「読むこと」領域の学習に、フレームリーディングの手法を取り入れ、自分のもっているフレームを生かしつつ、そのフレームを更新したり、新たなフレームを獲得したりしながら、文章のつながりを捉え、考えを深める授業づくりを進める。 ・対話を通して、新たな気付き・発見をしたり自分の考えを更新したりする授業 ・反応することを大切にし、互いの考えを認め合う授業 ・対話的、協働的で深い学びを実現するために必要な、基礎的な学力を確実に身に付ける。	自己表現力 自分の思いや考えを、多様な表現方法を用いて説明できる。 自分の思いや考えをまとめて表現できる。 自分の思いを相手に伝える事ができる。	自己理解力 自分の将来の夢や目標を持つ。 自分の得意な事や、夢中になれる事を見つける。 自分のよさに気付く。
---------	--	--	--	--	---	---	---	---

Ⅳ 目標・取組及び評価指標等の設定と評価

福山市立戸手小学校

年 目	中期経営目 標	重 点	分 類	短期経営目標	目標達成に 向けた取組	評価指標	中間評価(10月1日)			最終評価(2月末)					
							□指標に係る 取組状況	力以 評価	達成 評価	改善方策	□指標に係る 取組状況 ◎短期(中期)経営 目標の達成状況	力以 評価	達成 評価	総合 評価	改善方策
5	子どもが学 びに向かう 力、学び続 ける力を育 成する。		継 続	＜チャレンジ& チェンジする力＞ を育成する。	・自分の生活の課題解決 に向けて挑戦し、規則正 しい生活習慣を身に付け る。 ・中学校区で設定した木 曜日の「メディアコン ロールデイ」に、全校で 取り組む。	・「以前より心と体が 健康になったと感じら れた」児童を85%以 上にする。 ・就寝前1時間のメデ ィア不使用が達成でき た児童を90%以上に する。	・生活習慣を振り 返ることでの肯定 的評価は83.5% であった。 ・メディアコン ロールカードを活 用し達成した児童 の割合は69.7% であった。	3	3	・生活習慣の見直 しの継続と体育科 でサーキット運動 や体力づくりイベ ントを実施する。 ・学校だより等で 保護者への啓発を 継続する。					
5		☆	継 続	＜自己表現力＞ を育成する。	・全ての授業において自 分の思いや考えを表現す る場の工夫を行い、チャ レンジウィークを通して 交流する。 ・基礎学力の定着のため の授業や帯タイムの工夫 を行い、取組の効果を振 り返る。	・「対話を通して自分 の思いや考えを表現でき た」児童87%以上にす る。 ・単元末テスト(知技・ 国算)における正答率 40%未満の児童を10% 未満にする。	・表現力に関し て、児童の肯定 的評価は、92.2%で あった。 ・単元末テストに おける年度当初の 数値目標は、全ク ラスにおいて達成 している。	3	3	・継続して、各行事・ 全ての授業において 表現する場の工夫を 行うことについて全 教職員で意識統一し て取り組む。 ・数値と児童実態と に乖離があるため、 新たに指標を「(国 算・知技)における 70 点未満の児童を 20%以下にする」と する。					
5			継 続	＜自己理解力＞ を育成する。	児童が、主体的に課題を 発見し、自己目標を設定 して、実行できるよう に、活動を振り返る。	目標や夢の実現のため に、「何をしたいか」、 「何をすべきか」考える ことができた児童を 90%以上にする。	活動を振り返ること ができた児童は 93.9%であった。 また、次に何をすれ ばよいか主体的に考 えることができた児 童は90.5%であっ た。	3	3	マラソン大会、学習 発表会等や日々の授 業においても「振り 返り」→「次の目標 設定」を定着させる ことで、自己指導能 力を育成する。					
5	教職員が元 気・笑顔で 勤務できる 環境を充実 させる。		見 直 し	業務改善を図る ことで、教職員 が、支え合いなが らやりがいや充 実感を持って教 育活動を行う。	子ども主体の授業の実 現に向けた授業の自己 目標を設定し、取組の 交流することで、授業 改善を進める。	授業づくりにおける自 己目標に関わる取組が 児童の成長につなが っていると実感できる教 職員の肯定的評価 90%以上にする。	業務改善・「みる みるみせる」・授 業づくりポートフ ォリオの作成・取 組を実施。教職員 アンケートの肯定 的評価は82.3% に留まった。	3	3	授業づくりポートフ ォリオを基に、自己 目標における取組状 況を交流・リフレク ションする時間を確 保する。					

〔プロセス評価の評価基準〕

評価点	評価基準
5	取組の目的に対する共通理解が顕著に認められ、状況の変化、問題が生じた際は、協同的な課題解決が十分に図られた。
4	取組の目的に対する共通理解が認められ、状況の変化、問題が生じた際は、協同的な課題解決が概ね図られた。
3	取組の目的に対する共通理解が一定程度認められ、状況の変化、問題が生じた際は、協同的な課題解決がある程度図られた。
2	取組の目的に対する共通理解が認められ難く、状況の変化、問題が生じた際の協同的な課題解決があまり図られなかった。
1	取組の目的に対する共通理解が認められず、状況の変化、問題が生じた際の協同的な課題解決が図られなかった。

〔達成評価の評価基準〕

評価点	評価基準
5	目標を大幅に達成し、十分な成果をあげた。
4	目標を概ね達成し、望ましい成果をあげた。
3	目標をある程度達成し、一定の成果をあげた。
2	目標を下回り、成果よりも課題が多かった。
1	目標を大きく下回り、成果が認められなかった。

〔総合評価の評価基準〕

評価点	評価基準	
5	100%以上の達成度	十分に目標を達成できた。
4	80%以上100%未満の達成度	概ね目標を達成できた。
3	60%以上80%未満の達成度	ある程度目標を達成できた。
2	40%以上60%未満の達成度	あまり目標を達成できなかった。
1	40%未満の達成度	目標を達成できなかった。